

# 理研計器株式会社 本社

RIKENKEIKI Headquarters

No. 03-060-2019作成

新築  
事務所

発注者	理研計器株式会社	カテゴリ	A. 環境配慮デザイン	B. 省エネ・省CO <sub>2</sub> 技術	C. 各種制度活用	D. 評価技術/FB
設計・監理	株式会社大林組一級建築士事務所 OBAYASHI CORPORATION	E. リニューアル	F. 長寿命化	G. 建物基本性能確保	H. 生産・施工との連携	
施工	株式会社大林組	I. 周辺・地域への配慮	J. 生物多様性	K. その他		

## 住宅密集市街地に建つオフィスビル



### 概要

本建物は東京都板橋区に計画されたガス検知器メーカーの本社である。地上4階地下1階のアルミフィンとガラスによって構成されたメインファサードを化粧コンクリート打放し壁で囲み込む構成のオフィスである。

### 事業拠点集約と部門間連携強化

ガス検知器メーカーである理研計器株式会社は、創業の地である東京都板橋区小豆沢に現在も本社を構える。本敷地には計画以前、度重なる増築により建物が分散していた。部門間連携の強化、拠点集約、企業アイデンティティの創出を目的として、本社の建替えを行った。

### 住宅密集市街地に建つ本社オフィス

かつて工場・事務所が主であった本計画敷地は時代の変遷に伴い、現在は低層の集合住宅が並ぶ地域となっている。この

地域において事務所ビルを計画するにあたり、周辺住宅への視線制御、近隣への圧迫感の軽減、周辺街区の環境的な価値向上、近隣への影響が少ない工事など様々な要件が求められた。我々はその課題に対して、建物前面の通り側に大きなオープンスペースを作り出し、周辺に閉じながらも前庭に開く構成を導き出した。この前庭空間はオフィスビジョン部と周辺の距離を作り、集合住宅のプライバシー空間への視線を制御する。また正面道路から距離を作り出すことで、街への圧迫感を軽減する役割も果たす。近隣に連続する緑地との連続も考慮し、地域での緑のネットワークを構築、ただの駐車場ではなくリフレッシュできる庭として近隣住民も享受できるしつらえとした。さらにこのスペースは、周辺に配慮した工事計画においても大きな役割を果たしている。前庭空間に建っていた既存の建物を使用しながら新築工事を行い、その後既存建物を解体するという2段階の施工計画により、周辺地域に配慮した工事を可能にした。

建物データ	省エネルギー性能	CASBEE評価	
所在地	東京都板橋区	BP1 0.83	
竣工年	2018年	BE1 0.94	
敷地面積	3,380㎡	LCCO <sub>2</sub> 削減 100%	
延床面積	5,179㎡		
構造	RC造		
階数	地下1階、地上4階		

### 環境調整ファサード

オフィス空間において外への眺望と自然光を享受する為、本建物は前庭に向けて大きなガラス開口を設けている。このアルミカーテンウォールには3種類のアルミ型材を使った寸寸法の異なるフィンが多数取り付けられており、建物内への日射の遮蔽やライトシェルフとしての役割、周辺への視線制御など、さまざまな機能を兼ねている。また建物正面ファサードデザインにおけるコーポレートアイデンティティとして、取り付けられたフィンによって深い陰影と端正な表情をつくりだしている。

### コンクリート造

もう一方で本社BCP機能として高い耐震性能が求められた本建物では、コンクリート造を採用している。耐震壁を主に外壁際に計画して、敷地のうちの前庭以外3方向の開口部を最小限とすることで、周辺住宅への視線を遮りプライバシーに配慮するとともに、構造適合判定ルート1を満たす高い耐震性能を実現している。

### 知的生産性を促進させるバイオフィリックデザイン

本計画ではシンプルかつモノリスティックな外観と対照的に、内部空間においては部門間の連携を強化し、従業員がいきいきと働ける動的なインテリアデザインが求められた。また周辺地域との関係から開口部を多く設けることができない本敷地において、知的生産性やウェルビーイングの観点から、内部空間においていかに自然を享受できるかを模索した。本計画ではさまざまな色や素材が重なりあうことで空間的な奥行きを作り出すために、フランスの絵画手法「matièreマチエール」をインテリアデザインに展開、働く人のモチベーションを刺激する仕掛けをつくりだした。反射性の強い材料と建築要素を組み合わせることで、内部空間の各シーンに奥行きをもたらしている。さらに人々の繋がりをモチーフとしたデザインパターンをつくり、それを各マテリアルの配置やサイン、設備機器、アート、什器、器具に至るまで様々なデザインに展開した。一見するとシンプルな空間構成の中で様々な距離感を作り出すことで、オフィス共用空間での従業員同士のコミュニケーションの促進、モチベーションの刺激、知的生産性の向上に寄与することを意図している。マテリアルにおいて、人は自然と距離が近いほど生産性が高まるというバイオフィリックという考え方のもと、壁や床といった各要素に自然をモチーフとした質感を展開することで、生産性向上を目指している。食事・打合せ・レクリエーションスペースの1階ラウンジでは、視線制御も兼ねた壁面緑化壁とアーティストとコラボレーションしたアートウォールにより、緑に包まれた空間を実現している。

### 設計担当者

統括：賀持剛一／建築：上原耕、松岡兼司、安福賢太郎、豊島浩太郎／構造：小宮信明、並木康弘、富橋直哉、本郷康子／設備：大石晶彦、大代誠、藤澤寛久、水井啓喜、松田潤、鮫島佑典

### 主要な採用技術 (CASBEE準拠)

- Q2. 2. 耐用性・信頼性 (RC造)
- LR1. 1. 建物外皮の熱負荷抑制 (日射抑制ファサード)
- LR1. 2. 自然エネルギー利用 (太陽光発電、ライトシェルフ)
- LR1. 3. 設備システムの高効率化 (エコルミスクエア、LED照明、センサー制御)
- LR3. 2. 地域環境への配慮 (浸透性天然石インターロッキング、浸透トレンチ、廃棄物保管庫設置、分別スペース確保)

